

今日は、日本の内部に入り込んだソ連のハリガネムシが、日本が南進戦略に舵を取るように、どのように誘導して行ったのか、というお話をしましょう。

それはゾルゲ機関によって行われました。ゾルゲ（1895-1944）はコミンテルンのスパイです。ゾルゲと、その右腕となって働いた朝日新聞記者 尾崎秀実（1901-1944/おぎき ほつみ）。2人とも筋金入りの共産主義者でした。この2人の解説をさせていただきます。

ゾルゲの父親はドイツ人、母親はロシア人です。彼は第一次世界大戦で負傷し、本国ドイツに帰って療養する中で、共産主義の研究に取り組みました。当時 共産主義は、ちょっとしたインテリ学生なら、だれもが大きな関心を持って取り組んだ問題だったんですね。ゾルゲも例外ではなかったと思います。非常に優秀な人物でした。

研究しているうちに共産主義者になってしまい、やがて「共産主義こそが人類の不幸を解決する唯一の道だ」と確信するようになりました。そして、コミンテルンからスカウトされ、ソ連共産党のスパイとして活動を始めたんです。

彼は怪しまれないように、まずドイツでナチス党に入党し、ナチスの正式な黨員になりました。そして、来日して日本文化を徹底的に研究し、日本文化大好き外国人として、日本国内で大変注目を浴びるようになります。その活躍ぶりを見た駐日ドイツ大使に抜擢され、いつでもドイツ大使館に来ていいということで、様々なミッションを受けるようになっていきました。

ゾルゲが上海にいた時、上海で朝日新聞の特派員として活躍していたのが尾崎秀実でした。上海は国際都市で、国民党という政党が一応あるけど、租界（そかい）という治外法権が成立しているエリアです。蒋介石（しょう かいせき/1887-1975）といえども手出しできないわけですよ。租界という治外法権のエリアというのはスパイ天国ということですよ。上海で色んな出会いがあるんですが、ゾルゲと尾崎秀実もそこで劇的に出会いました。

尾崎秀実も筋金入りの共産主義者です。そのことは、ほとんどの人が知らなかったんですね。妻にももちろん言わなかった。彼が共産主義者であることは、自分以外の数人しか知らなかったんです。彼とゾルゲは同じ志を持つ同士として手を結びました。

当時の中国は非常に複雑怪奇な情勢で、国民党があるけどその中に色んな派閥があって、その派閥の力学が外から見ると非常に難しい。分かりにくい。国民党以外にも軍閥といって、中国各地に私兵集団がいるんです。この中国のことを分析していくのは日本の政治家も頭を悩ますことで、これを正確に理解し、分析できる人はほとんどいなかった。その中で、尾崎秀実是中国問題のエキスパートだったのです。

それで、貴族出身の総理大臣 近衛文麿（このえ ふみまろ/1891-1945）の第一次近衛内閣の時、「ぜひ私のブレーンになってほしい」ということで、彼は首相官邸に自分の机を置くことができました。そして、書記長室にも出入り自由。秘書長室にも出入り自由。近衛内閣の機密条項について、自由に閲覧できる立場にあったんですね。

つまり、ソ連のスパイが日本の政権の中枢、日本の内閣の中枢、総理大臣の隣で活動するところまで食い込むことができたわけです。

そればかりか、近衛文麿にはシンクタンクというか、政策集団の“昭和研究会”がありました。尾崎は昭和研究会の正式ブレーンとして席を置いていたのです。西園寺公望（さいおんじ きんもち）の孫の西園寺公一（さいおんじ きんかず/1906-1993）もその中に入っているのですが、彼も共産主義者でした。

尾崎は昭和研究会の一員でブレーンなので、近衛内閣の外交方針“今 日本がどの方向に進むべきか、どのように戦っていくべきか、どの国と同盟を結び、どの国と敵対すべきか”などについて、近衛文麿に提言することができたんです。彼は徹底して南進戦略を推進しました。

「首相閣下。ソ連軍は強いです。ですが、ソ連は日本と戦うつもりがありません。シベリアには潤沢な油田がありますが、あんな辺ぴな、冬場は凍り付いてしまうような所から日本まで、どうやって油を取り出しますか。あんな所に行っても、油は簡単に取れませんよ。北進戦略は下の下、愚の骨頂。それよりも南進戦略をやりましょうよ。南進ならインドネシアだから年がら年中暑いし、そこを押さえたら自由に油を取り出して、日本の油供給問題は解決できると思います。こちらの方がはるかに良い。簡単です。」
強力に南進戦略を推進したんです。その時既に、日米関係は非常に悪くなっていました。

遂に、北進ではなく南進戦略に舵を切ることが正式に決まりました。決まったという情報を尾崎がゾルゲに言う。ゾルゲはそれをソ連本国に打電する。日本は絶対にソ連に攻撃を仕掛けないということが分かったので、ソ連と満州の国境にいたソ連軍の最精鋭部隊 25 万人をヨーロッパ戦線に移動させることができた。この最精鋭部隊が、独ソ戦でのソ連の勝利確定に決定的役割を果たしたとも言われています。

共産主義ソ連を生き残らせ、日米戦争に引っ張りこんだのがゾルゲと、ゾルゲの右腕として活躍した尾崎秀実なのです。

この2人は太平洋戦争が始まる直前に（今日は敢えて太平洋戦争と言うときますけど）バテてしまいました。特高（とっこう）警察が、日本にいるアメリカ共産党の動きをずーっと探っていたんです。その探りの中で、ゾルゲと尾崎秀実がソ連のスパイであることを探り当ててしまうんですね。彼らはすぐに逮捕され、最終的には死刑になりました。これでゾルゲ機関は、日本においては壊滅したのです。

しかし、“日本を日米戦争に引き込んだ張本人”と言ってもいいゾルゲの墓は日本にあるんです。3年前に私は多磨霊園に行きました。多磨霊園は日本最初の公立墓地ですよ。東京ドーム 27 個分くらいあるんですか、非常に広い公園墓地で、日本の有名人たちのお墓がたくさんあります。東郷平八郎（とうごう へいはちろう）・山本五十六（やまもと いそろく）・内村鑑三（うちむら かんぞう）・新渡戸稲造（にとべ いなぞう）・三島由紀夫（みしま ゆきお）・『サザエさん』を描い

た長谷川町子（はせがわ まちこ）・有島武郎（ありしま たけお）・与謝野鉄幹（よさの てっかん）・与謝野晶子（よさの あきこ）などなど。そこに、ゾルゲの墓もあるのです。

私は数名で行って、日本の近現代史を「この人がしたのはこんなことでした。あんなことでした」などとお話ししながらお墓巡りをしたんです。

どのお墓も寂れてました。お盆の時期ではなかったからです。確か10月末くらい。

ところが、ゾルゲの墓は花束だらけですよ。ゾルゲの墓だけです。非常に複雑な気持ちがしましたね。季節外れの時に花束だらけということは、いつも花束だらけだと予測されます。

日米戦争に引き込み、ソ連の謀略のために日本をメチャクチャにすることを働いたゾルゲに花束を手向ける、おそらく日本の方々がまだまだいるのです。

これはいったい何を意味するのか、と考え込まずにはおれませんでした。

次回は“アメリカにおけるソ連の工作がどのように効いていたのか”についてお話ししますので、よろしければお付き合いください。

チャンネル登録もよろしくお願いします。

ではまた、ごうちゃんねるでお会いしましょう。それまで皆さん、お元気でいらしてください。さよなら！